

# 野菜の価格と消費との関係について

## 野菜の価格と消費との関係について（試案）

### I 短期的な動向

(1) 本年8月の家計調査によると食料購入金額のうち生鮮野菜の購入金額は一人当たり1,620円で前年の1,766円と比較すると8%の減少であったが、1人当たり購入量は4,393gと前年の4,392gと同程度であった。

従って、購入金額の減少は、購入単価の低下によるものと考えられる（図1、2）。

このことは、8月の消費者物価指数をみても生鮮野菜は対前年同月比▲10.1%であり、物価指数の下落への寄与度が最も高い品目となっていることから裏付けられる。（表1）

また、この購入金額の減少を世帯主の年齢階層別にみると、34歳以下の階層で減少が大きい傾向がみられ、長期的に見た野菜の国内消費量の減少など、野菜消費の構造的な変化が懸念される。（表2）

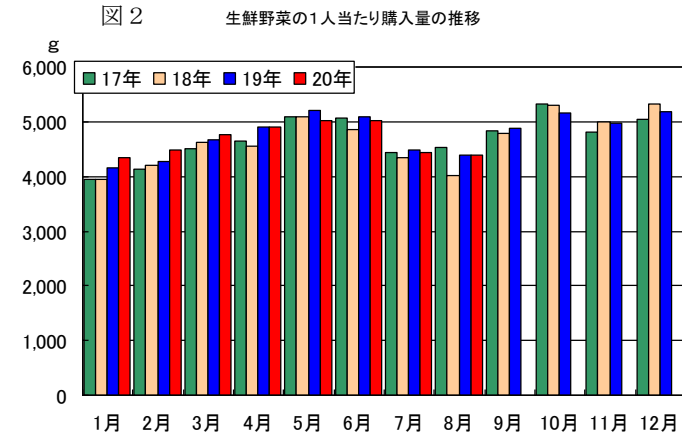
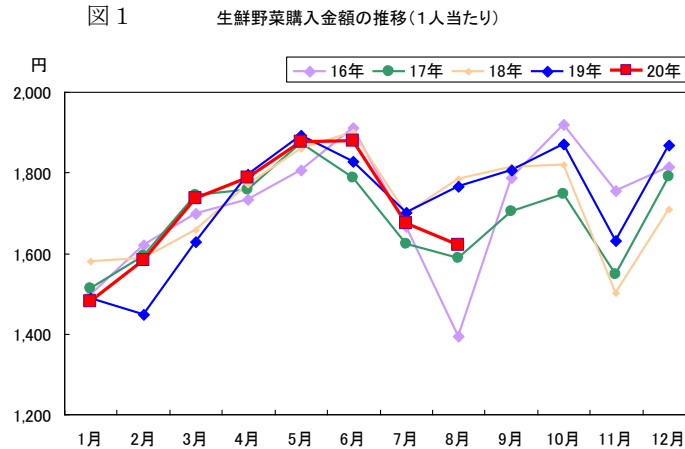


表1 8月の消費者物価指数の前年同月比に対する寄与の多かった項目

上昇			下落		
項目	前年同月比(%)	寄与度	項目	前年同月比(%)	寄与度
1 自動車等関係費	7.8	0.63	1 生鮮野菜	▲ 10.1	▲ 0.18
2 他の光熱費	54.7	0.37	2 教養娯楽耐久財	▲ 19.3	▲ 0.15
3 穀類	8.1	0.17	3 家庭用耐久財	▲ 2.9	▲ 0.03

表2 世帯主の年齢階層別にみた生産野菜購入金額の対前年同月比

夫婦と子供の世帯の世帯主の年齢区分	全体	～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65歳以上
20年8月の生鮮野菜購入金額の対前年同期比	92	86	85	83	92	93	90	102	96	89	90

資料：図1、図2、表2は総務省「家計調査年報」。表1は総務省統計局「消費者物価統計」

(2) 8月のチェーンストア販売統計をみると、農産品の販売金額は対前年同月比で91.1%となっており、家計調査でみた野菜の購入金額の減少傾向と同様となっている。

8月の消費者物価指数(野菜)は、前述のとおり10.1%下落していることから、購入量は横ばいであったことがうかがわれる。

表3 チェーンストア販売統計(20年8月)

取扱部門	構成比	販売金額 (万円)	前年同月比(%)		前月比 (%)
	(%)		店舗調整前	店舗調整後	
総販売額	100	110,506,828	93.7	99	97.9
食料品	64.2	70,988,601	95.3	100.9	103.9
農産品	8.5	9,445,779	91.1	97.6	109
畜産品	6.7	7,399,365	99.2	103.8	104
水産品	6.1	6,701,356	91.2	97.3	101.7
惣菜	7.1	7,886,633	95.8	101.9	110
その他食品	35.8	39,555,468	96.3	101.7	101.9
衣料品	9.9	10,896,115	85.6	92.5	78.1
住関連品	19.5	21,556,359	94	96.5	93.2
サービス	0.4	421,866	93.3	95.8	99.5
その他	6	6,643,887	91.2	99.6	95.2

◎会員企業の規模

企業数	71社	
店舗数	8,597店	(対前年同月比 67店減/対前月 25店減)
売場面積	22,395,471㎡	(対前年同月比 96.4%)
売場1㎡当たり売上額	49,343円	(対前年同月比 97.2%)
従業員数	427,202人	(対前年同月比 93.3%)
(正社員)	122,991人	(男 84,382 / 女 38,609)
(パート)	304,211人	(男 26,688 / 女 277,523)

- (注) ①販売金額には消費税額を含まない。  
 ②構成比は計算処理上必ずしも100%にはならない。  
 ③パートは正社員に換算した人数で、標準的に労働時間8時間を一人とする。  
 ④前年同月比の「店舗調整前」は全店ベースの伸び率、「店舗調整後」は既存店ベースの伸び率を表す。

(資料) 日本チェーンストア協会による。

(3) 外食の売上高をみると、全店データでは8月は対前年同月比102.1とプラスとなっている。

野菜の消費に最も関係が深いと思われるファミリーレストランでも全店データで98.9、既存店データで97.3と小幅な減少にとどまっている。これについて、(社)日本フードサービス協会では、相次ぐ食品等の値上げにより、家内食の食材費も上昇していることにより、外食のコストパフォーマンスの高さが見直されたことが要因と分析している。

表4 外食産業の売上高

①全店データ

	事業者数	店舗数	売上高 前年比	店舗数 前年比	客数 前年比	客単価 前年比
全体	172	29,036	102.1	99.8	100.5	101.6
ファーストフード	42	15,255	105.6	100.4	102.9	102.6
ファミリーレストラン	53	9,454	98.9	99.0	98.6	100.3
パブ/居酒屋	30	1,871	99.3	97.4	96.0	103.4
ディナーレストラン	22	380	99.0	98.2	99.8	99.1
喫茶	9	1,825	98.8	101.8	92.0	107.4
その他	16	251	103.4	104.6	107.4	96.3

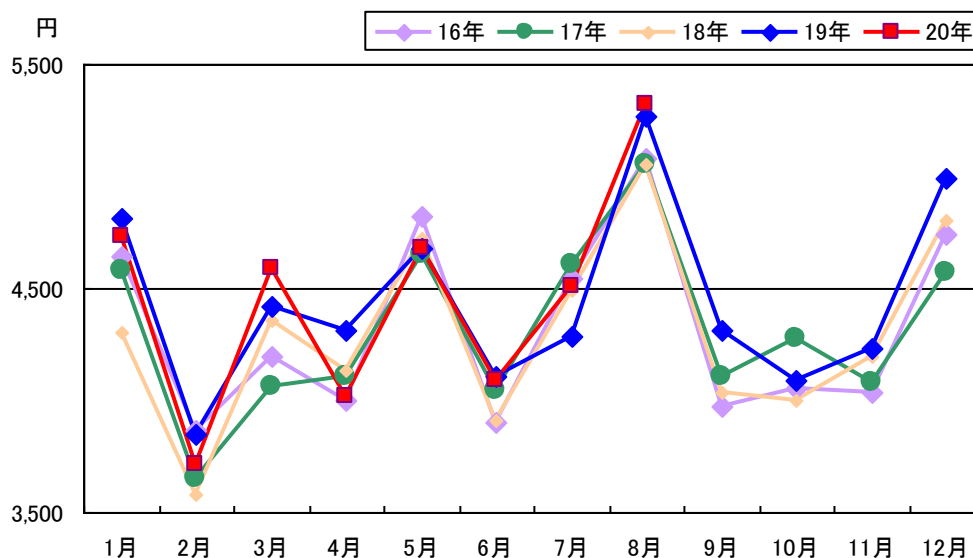
(資料) (社)日本フードサービス協会による。

②既存店データ

	事業者数	店舗数	売上高 前年比	客数 前年比	客単価 前年比
全体	166	25,404	100.1	98.7	101.4
ファーストフード	41	13,819	103.0	100.6	102.4
ファミリーレストラン	49	8,412	97.3	96.5	100.8
パブ/居酒屋	29	1,733	98.2	94.3	104.1
ディナーレストラン	22	347	99.0	98.8	100.2
喫茶	9	696	95.7	91.5	104.6
その他	16	397	96.3	96.2	100.1

なお、家計調査においても8月の外食費は5,318円で前年の5,268円と比較すると1%の増加となっている(図3)。

図3 外食費の推移(1人当たり)



資料：総務省「家計調査年報」

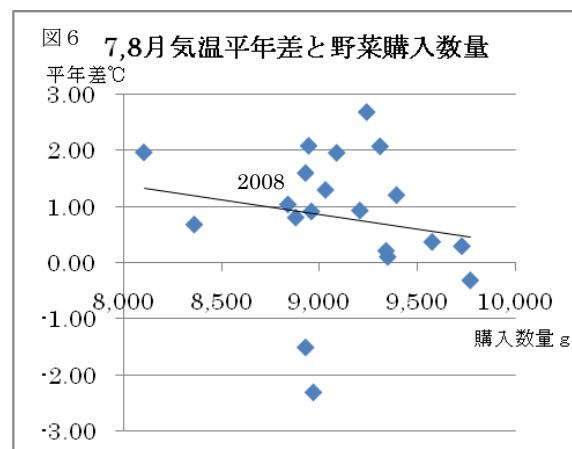
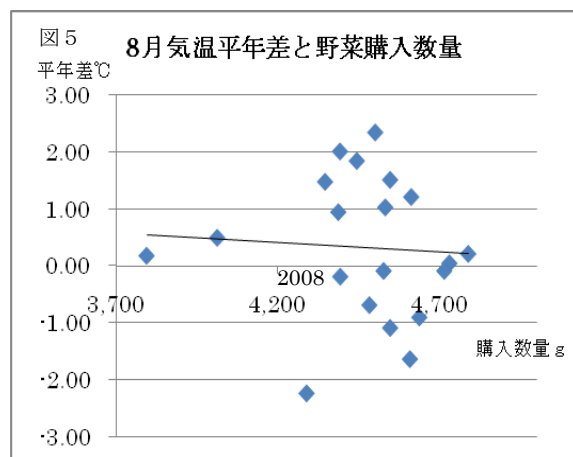
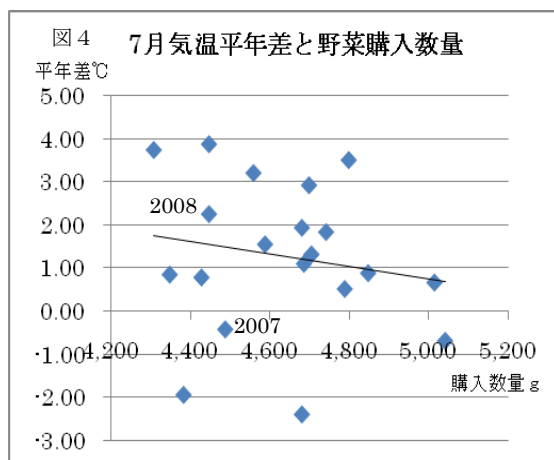
(4) 過去20年間の気温と野菜の購入量の関係を見ると、気温が高い夏には購入量が減少するという点については、弱い相関がみられるものの、他の要因も影響することも考えられ、はっきりした傾向はみられない。

表5 7月、8月の気温の平年差と野菜の購入量

年	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
7月購入量(g)	5,042	4,848	4,742	5,015	4,681	4,799	4,588	4,705	4,681	4,789
7月気温平年差	-0.68	0.88	1.83	0.67	-2.38	3.50	1.55	1.32	1.93	0.52
8月購入量(g)	4,730	4,547	4,608	4,714	4,289	4,444	4,501	4,637	4,527	4,788
8月気温平年差	0.05	1.52	-1.63	-0.08	-2.23	1.85	2.35	-0.90	-0.08	0.22
7、8月購入量合計(g)	9,772	9,395	9,350	9,729	8,970	9,243	9,089	9,342	9,208	9,577
7~8月気温平年差	-0.32	1.20	0.10	0.29	-2.31	2.68	1.95	0.21	0.93	0.37

年	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	相関係数	回帰式	決定係数
7月購入量(g)	4,686	4,699	4,447	4,559	4,383	4,308	4,428	4,348	4,488	4,447	-0.17	$y = -0.0014x + 7.9549$	0.0298
7月気温平年差	1.10	2.92	3.87	3.20	-1.93	3.73	0.78	0.85	-0.42	2.25			
8月購入量(g)	4,346	4,612	4,483	4,387	4,547	3,795	4,532	4,013	4,392	4,393	-0.06	$y = -0.0003x + 1.8145$	0.0040
8月気温平年差	1.48	1.22	-0.68	0.95	-1.08	0.18	1.03	0.50	2.02	-0.18			
7、8月購入量合計(g)	9,032	9,311	8,930	8,946	8,930	8,103	8,960	8,361	8,880	8,840	-0.18	$y = -0.0005x + 5.574$	0.0308
7~8月気温平年差	1.29	2.07	1.59	2.08	-1.51	1.96	0.91	0.68	0.80	1.03			

資料：気象はベジ探(原資料：日本気象協会)。購入量は家計調査による。



## (5) 卸売市場への入荷量

卸売市場への入荷量について8月下旬に価格が低落したキャベツをみると、特に8月の東京都中央卸売市場では前回市場隔離を実施した平成17年と同程度で入荷量が多かったことがわかる。

また、レタスでは6月の低温の影響から全般的に6月の入荷量が少なく、その分が7月にずれ込んでいることがわかる。更にトマトの8月の入荷量は産地である東北が中下旬の天候不順等から、九州を除く卸売市場では過去5年もっとも少なくなっている。

### ① キャベツ（入荷量の推移）

図7 東京都中央卸売市場のキャベツ入荷量の推移

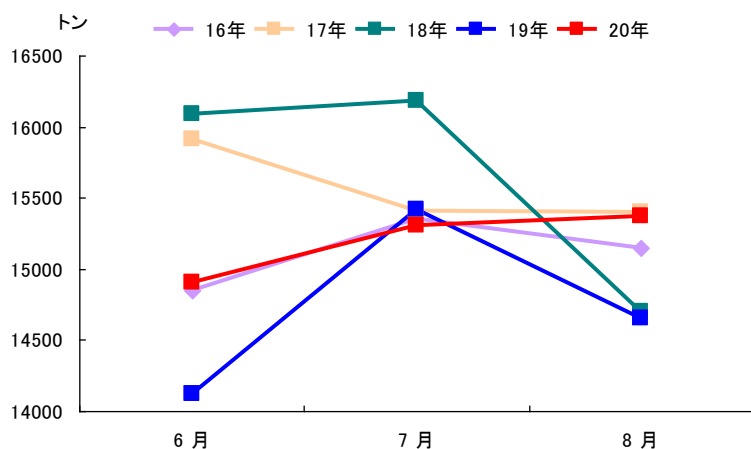


図8 大阪府中央卸売市場のキャベツ入荷量の推移

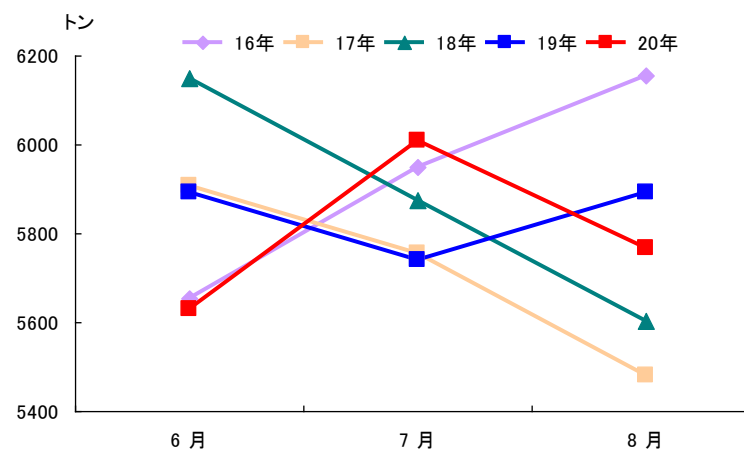


図9 東北地方の卸売市場のキャベツ入荷量の推移

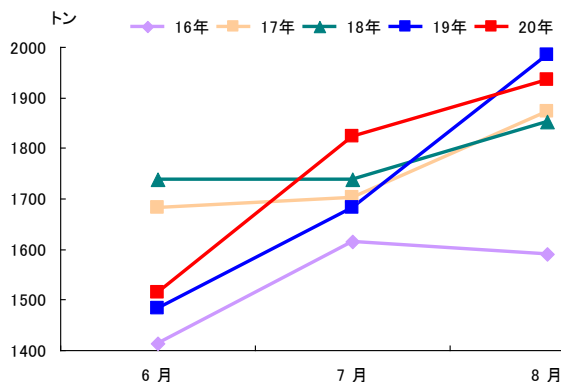


図10 名古屋市中央卸売市場のキャベツ入荷量の推移

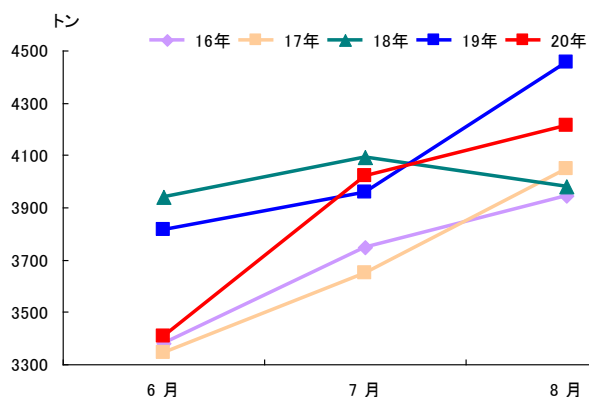
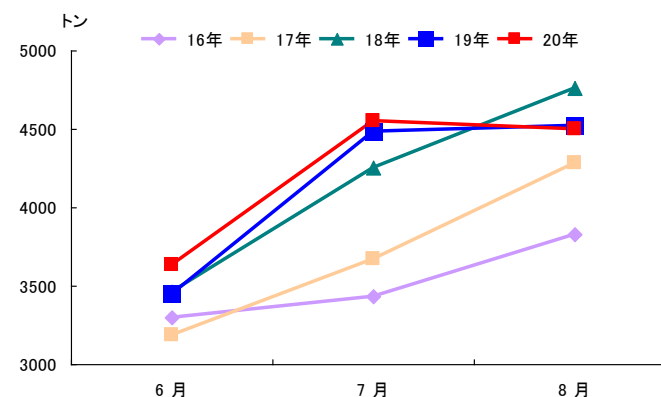


図11 九州地方の卸売市場のキャベツ入荷量の推移



資料：ベジ探 原資料：農林水産省「青果物流通統計旬報、月報」

(価格の推移)

図 12 東京都中央卸売市場のキャベツ価格の推移

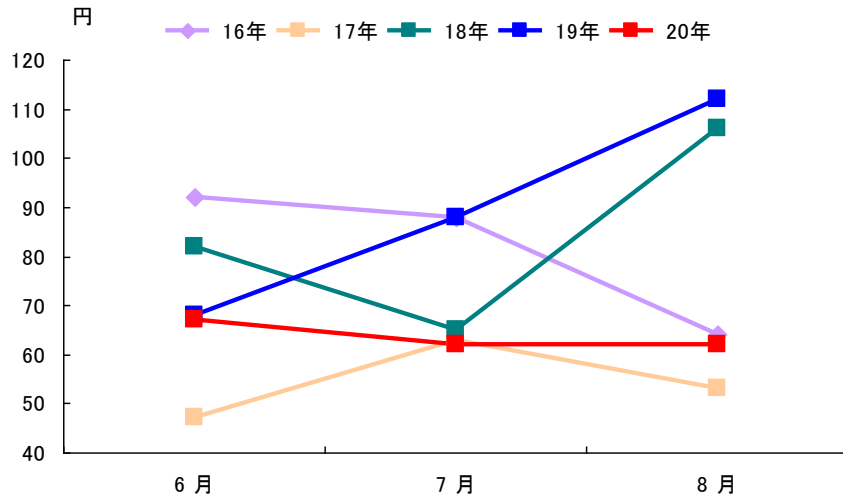


図 13 大阪府中央卸売市場のキャベツ価格の推移

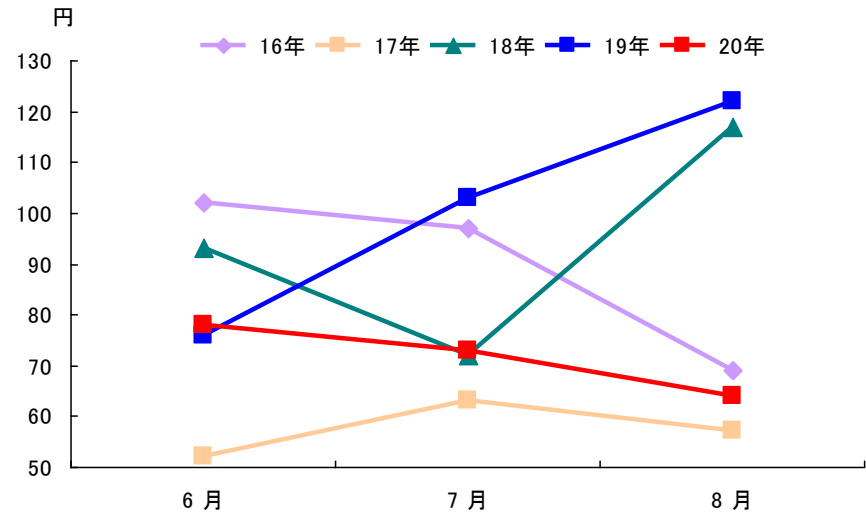


図 14 東北地方の卸売市場のキャベツ価格の推移

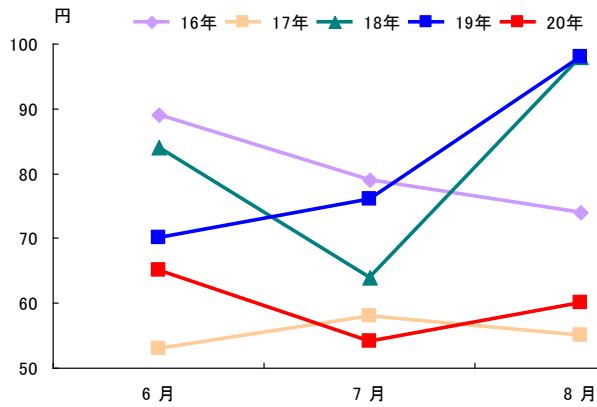


図 15 名古屋市中央卸売市場のキャベツ価格の推移

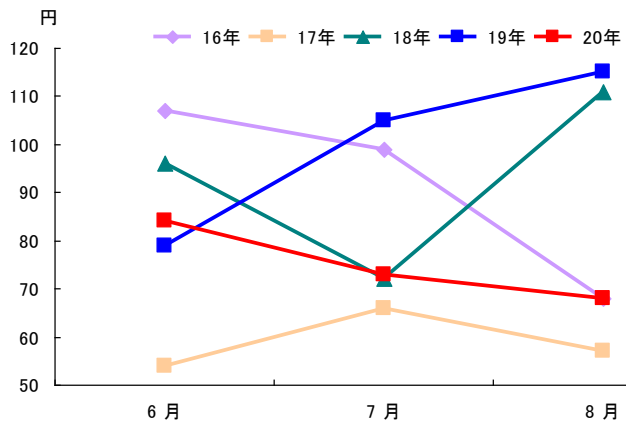
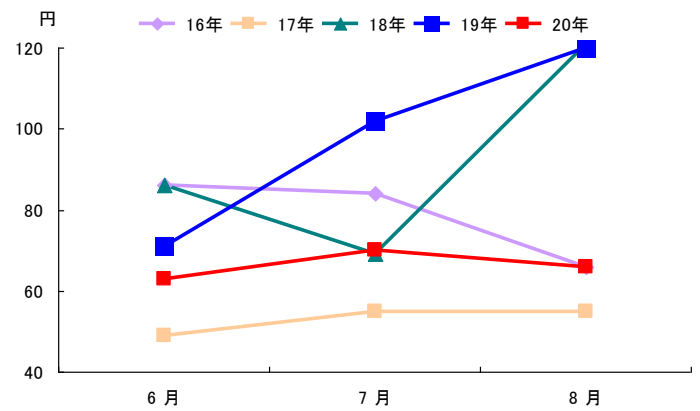


図 16 九州地方の卸売市場のキャベツ価格の推移



② レタス（入荷量の推移）

図 17 東京都中央卸売市場のレタス入荷量の推移

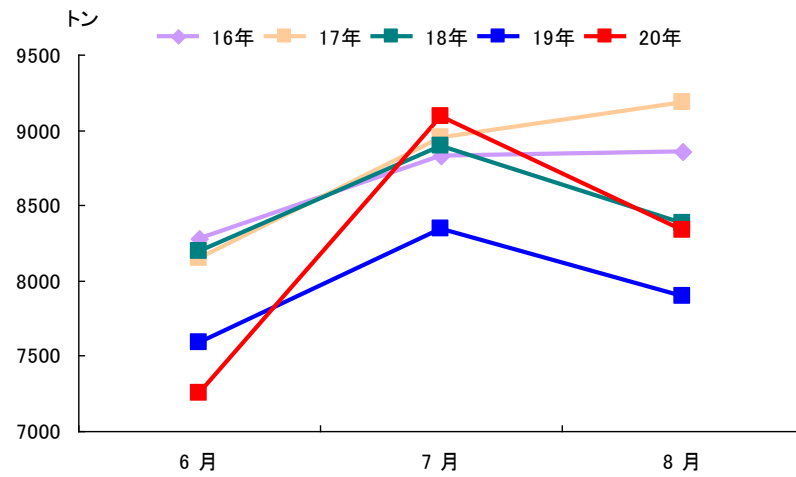


図 18 大阪府中央卸売市場のレタス入荷量の推移

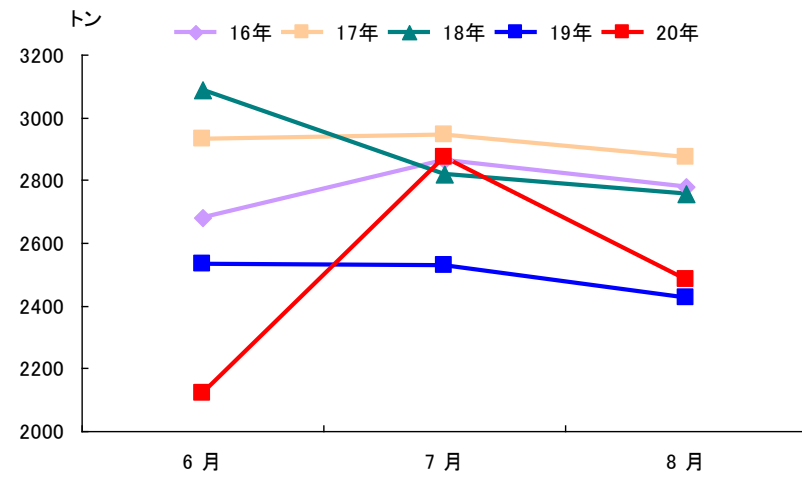


図 19 東北地方の卸売市場のレタス入荷量の推移

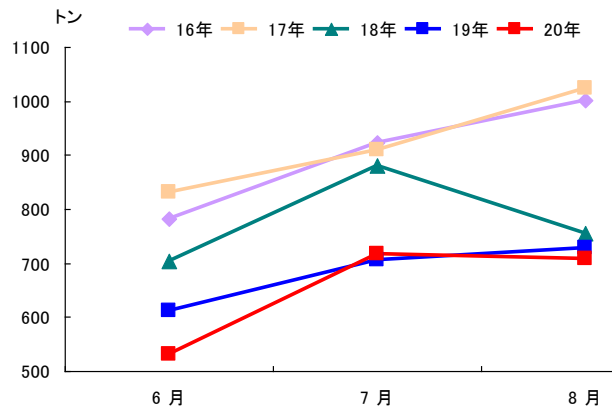


図 20 名古屋市中央卸売市場のレタス入荷量の推移

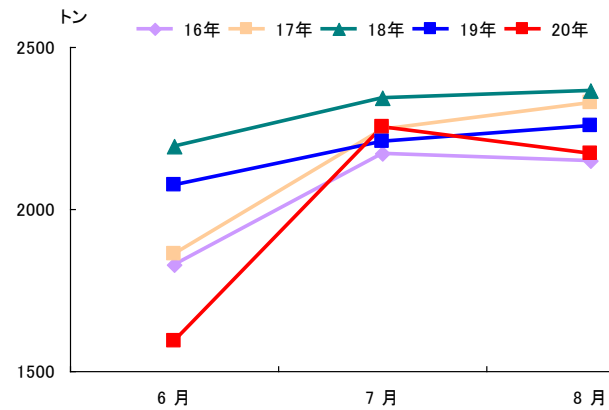
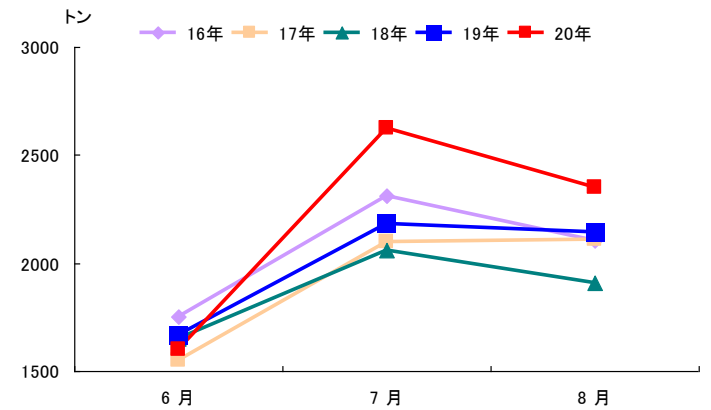


図 21 九州地方の卸売市場のレタス入荷量の推移



資料：ベジ探 原資料：農林水産省「青果物流通統計旬報、月報」



(価格の推移)

図 22 東京都中央卸売市場のレタス価格の推移

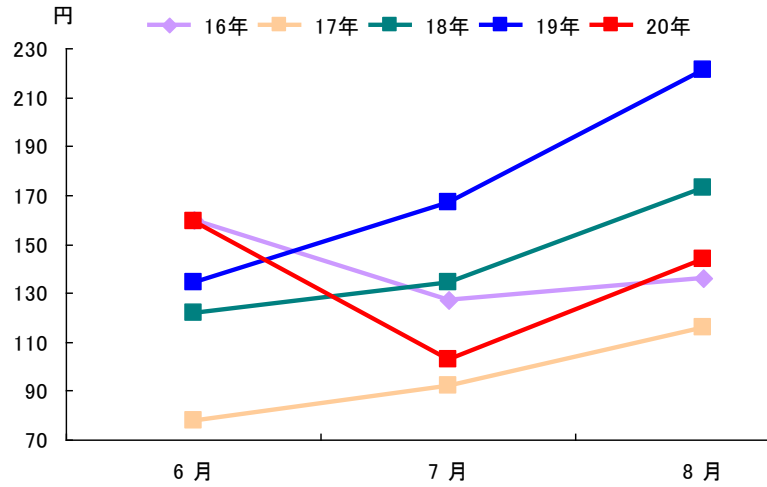


図 23 大阪府中央卸売市場のレタス価格の推移

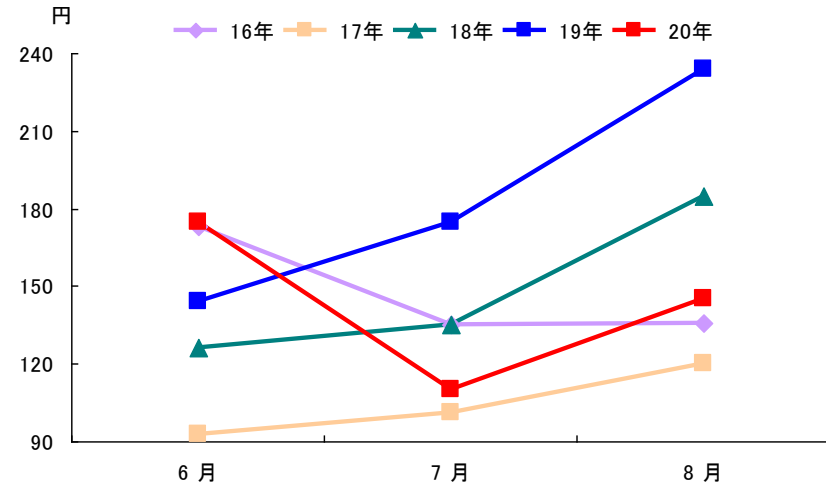


図 24 東北地方の卸売市場のレタス価格の推移

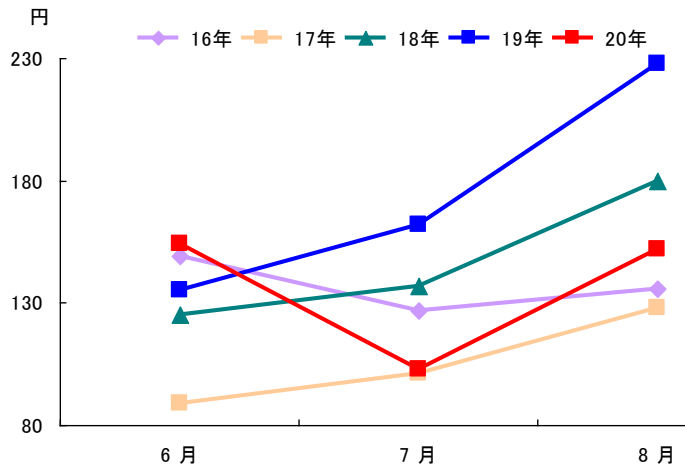


図 25 名古屋市中央卸売市場のレタス価格の推移

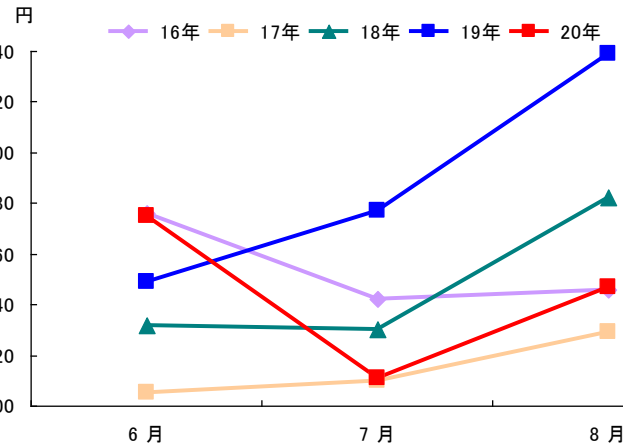
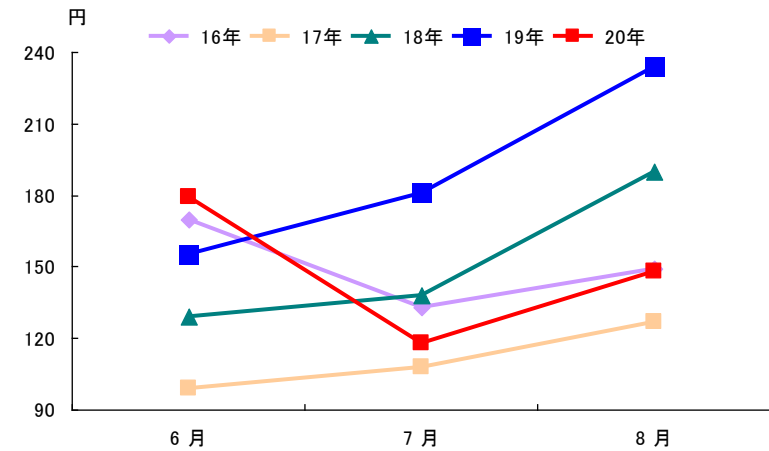


図 26 九州地方の卸売市場のレタス価格の推移



### ③ トマト（入荷量の推移）

図 27 東京都中央卸売市場のトマト入荷量の推移

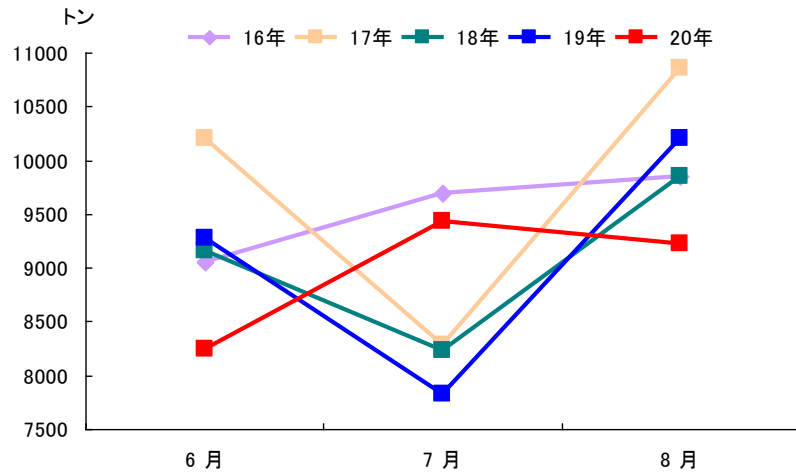


図 28 大阪府中央卸売市場のトマト入荷量の推移

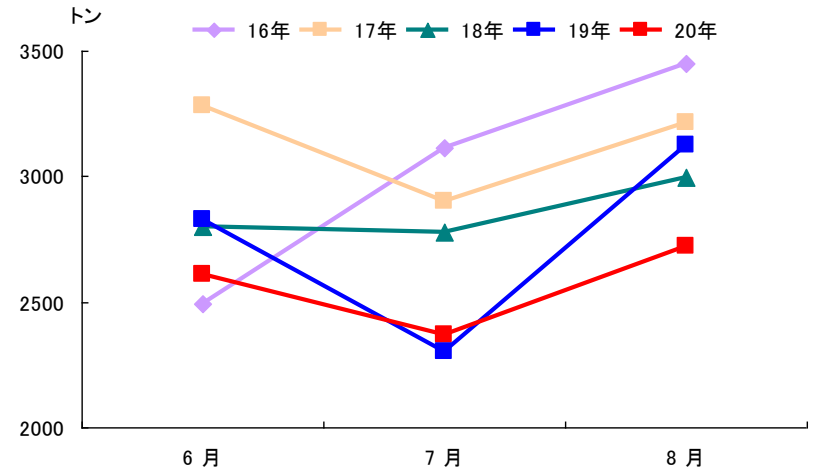


図 29 東北地方の卸売市場のトマト入荷量の推移

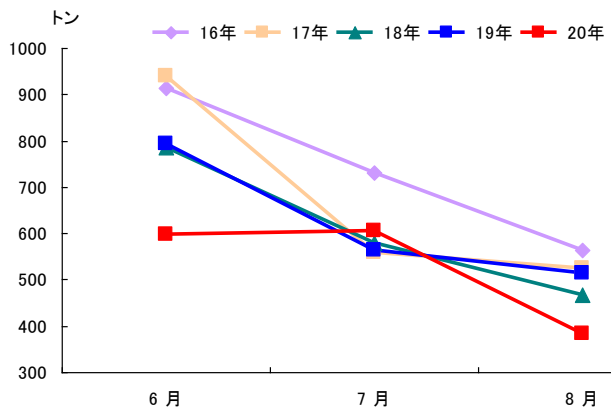


図 30 名古屋市中中央卸売市場のトマト入荷量の推移

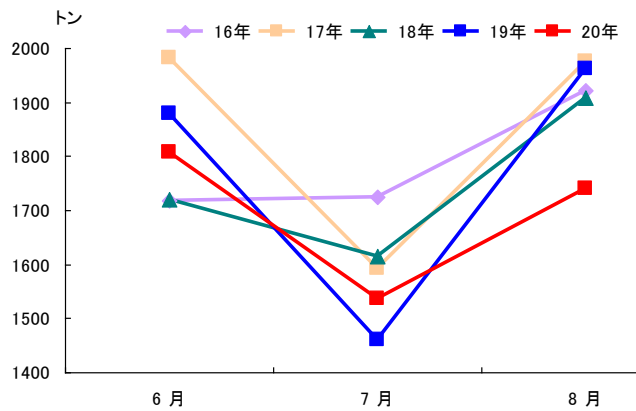
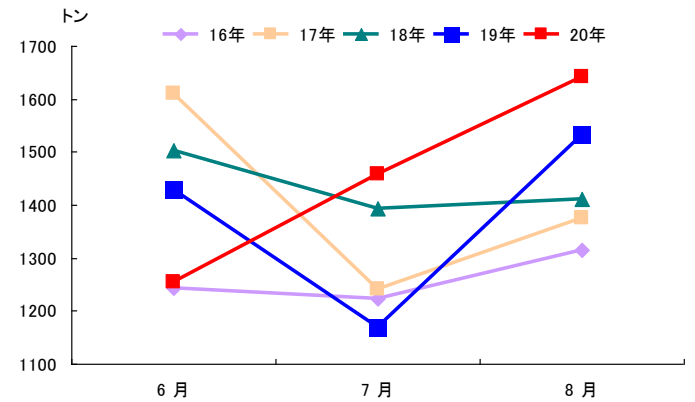


図 31 九州地方の卸売市場のトマト入荷量の推移



資料：ベジ探 原資料：農林水産省「青果物流通統計旬報、月報」

(価格の推移)

図 32 東京都中央卸売市場のトマト価格の推移

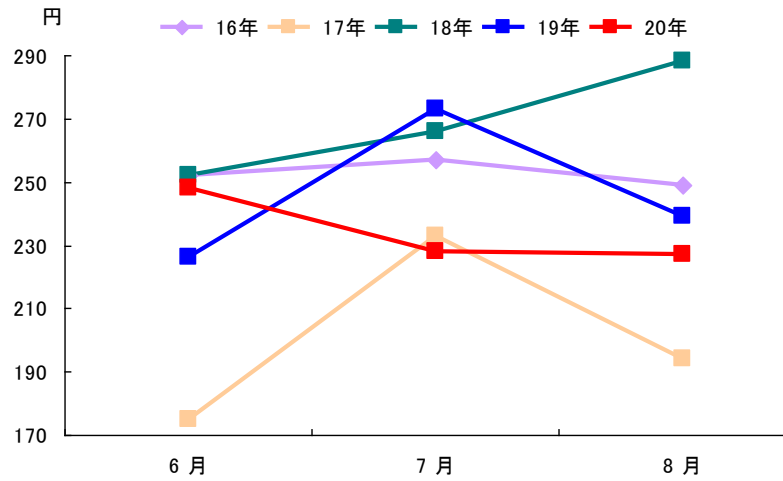


図 33 大阪府中央卸売市場のトマト価格の推移

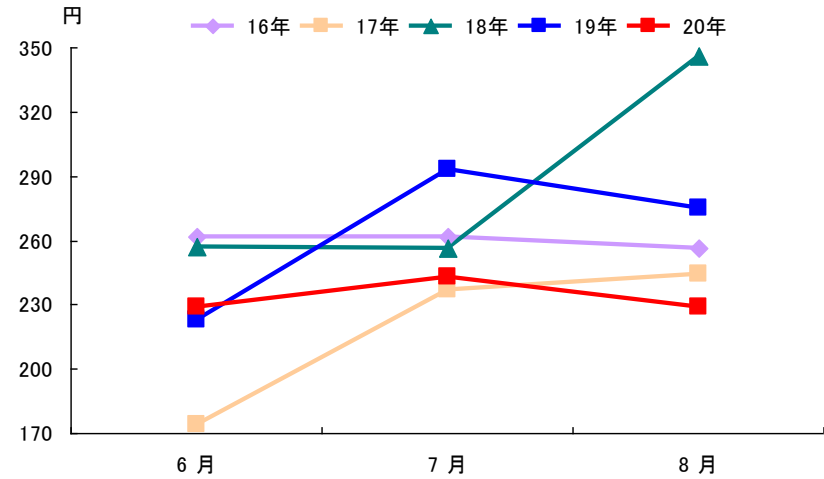


図 34 東北地方の卸売市場のトマト価格の推移

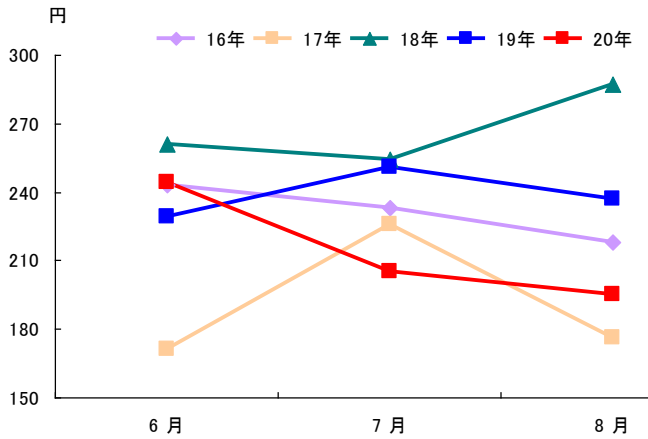


図 35 名古屋市中央卸売市場のトマト価格の推移

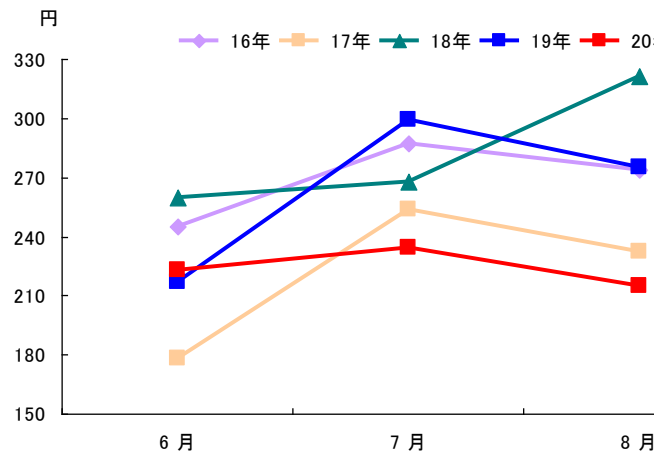
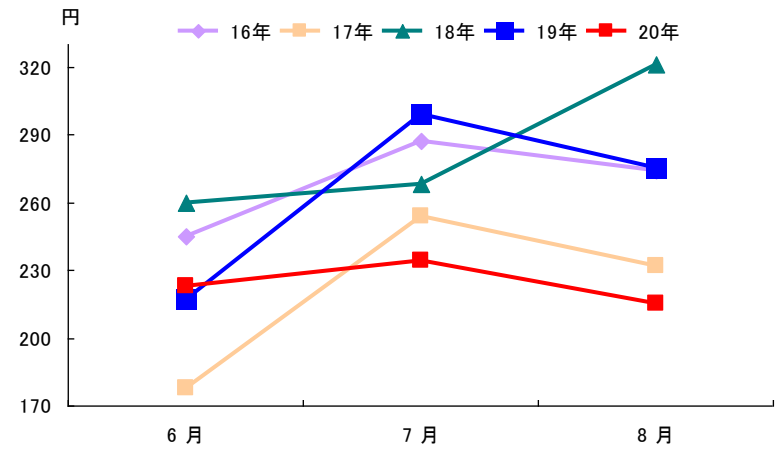
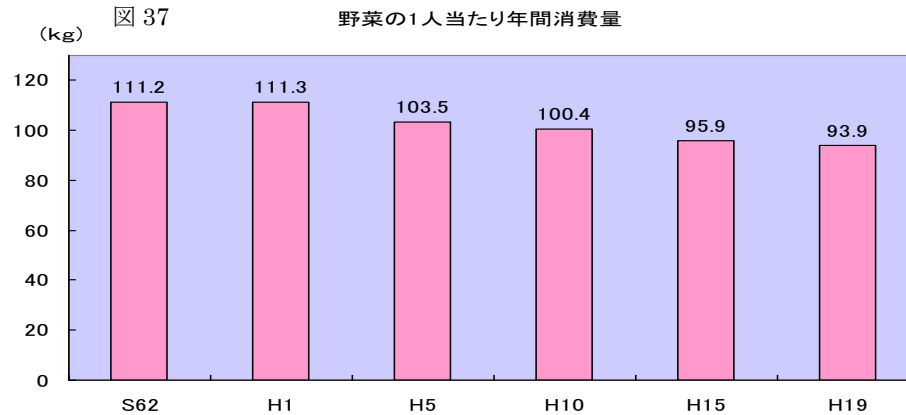


図 36 九州地方の卸売市場のトマト価格の推移



## 2 長期的にみた野菜消費の変化

- (1) 野菜の年間1人当たり消費量について食料需給表でみると昭和62年には111kgであったが、平成19年には93.9kgとこの20年間に約15%減少している(図37)。



資料：農林水産省「食料需給表」

注：平成19年は速報値

- (2) 家計調査でみると、この20年間に生鮮野菜の購入量は59.9kgから56.2kgへと減少する一方、食の外部化の進展に伴い、サラダ、調理食品、冷凍調理食品などの購入金額は大きく伸びている(表6)。

表6 食品別購入金額の変化

	昭和62年		平成19年		b/a
	金額(円)	1人当たり金額(a)	金額(円)	1人当たり金額(b)	
サラダ	1,327	352	2,888	920	261
調理食品	63,573	16,863	100,909	32,137	191
冷凍調理食品	2,415	641	5,207	1,658	259
果実・野菜ジュース	9,025	2,394	9,300	2,962	124
外食	153,395	40,688	164,860	52,503	129

資料：総務省「家計調査年報 昭和62年、平成19年」

注：世帯人員は昭和62年：3.77人、平成19年：3.14人である。

(3) また品目別の購入数量の変化をみると、特に減少している品目は、さといも(昭和62年を100とした場合の平成19年の指数:55.9)、ほうれんそう(同62.3)、きゅうり(同70.4)、なす(同75.8)、はくさい(同77.6)などである。また、だいこん漬(同74%)、はくさい漬(同72%)も購入数量は減少している。

一方レタス、だいこん、にんじん、トマト、ピーマン、ブロッコリーは購入数量が増加しており、特にブロッコリーの増加が大きい(表7)。

同様に作付面積および出荷量を昭和62年と平成17年で比較してみると(表8)、出荷量が大きく減少している品目と消費量で減少率が高い品目が重なっており、中長期的には、消費者ニーズの変化に生産サイドも対応してきたことがうかがわれるが、①ここ数年野菜価格の低迷が続いていること、②その一方で消費の減退に歯止めがかからないこと、③このような中にあっても伝統野菜ブームや「こだわりやさい」の消費の伸び、さらに直売所での地場野菜の販売の伸びなどを考えれば、品目ごとの生産と消費の動向の一致は、あくまで野菜の供給を前提としたものであり、タイムリーに消費ニーズに対応できていれば、野菜の消費が伸びていた可能性は否定できない。

表7 野菜の品目別購入量の変化

	昭和62年		平成19年		b/a
	数量(g)	1人当たり数量(a)	数量(g)	1人当たり数量(b)	
生鮮野菜	225,840	59,905	176,391	56,175	93.8
キャベツ	20,893	5,542	17,247	5,493	99.1
きゅうり	15,209	4,034	8,921	2,841	70.4
さといも	5,132	1,361	2,390	761	55.9
だいこん	22,095	5,861	15,440	4,917	83.9
たまねぎ	18,243	4,839	15,526	4,945	102.2
トマト	13,228	3,509	11,847	3,773	107.5
なす	8,067	2,140	5,095	1,623	75.8
にんじん	9,876	2,620	8,600	2,739	104.6
ねぎ	6,025	1,598	5,091	1,621	101.5
はくさい	12,821	3,401	8,290	2,640	77.6
ピーマン	2,859	758	2,459	783	103.3
ほうれんそう	7,578	2,010	3,934	1,253	62.3
レタス	6,541	1,735	5,628	1,792	103.3
ブロッコリー	1,910	507	3,391	1,080	213.2
ばれいしょ	16,581	4,398	11,586	3,690	83.9
だいこん漬	2,695	715	1,666	531	74.2
はくさい漬	1,753	465	1,049	334	71.8

資料:総務省「家計調査年報 昭和62年、平成19年」

注1:ブロッコリーの数値は調査開始年の平成元年のものである。

注2:世帯人員は昭和62年:3.77人、平成19年:3.14人である。

表8 品目別作付面積・出荷量

(単位:ha、トン)

	昭和62年		平成17年		増減率	
	作付面積(a)	出荷量(b)	作付面積(c)	出荷量(d)	作付面積(c/a)	出荷量(d/b)
キャベツ	41,500	1,374,000	33,500	1,161,000	81	84
きゅうり	22,300	845,700	13,400	566,300	60	67
さといも	28,500	236,200	15,000	108,500	53	46
だいこん	64,900	1,839,000	39,100	1,248,000	60	68
たまねぎ	29,400	1,115,000	23,000	944,400	78	85
トマト	15,100	726,300	13,000	668,100	86	92
なす	18,700	413,300	11,400	293,600	61	71
にんじん	23,800	570,800	19,000	539,700	80	95
ねぎ	24,000	406,300	23,100	380,800	96	94
はくさい	31,900	1,028,000	19,800	702,200	62	68
ピーマン	4,670	145,800	3,620	131,100	78	90
ほうれんそう	27,200	312,000	23,700	239,500	87	77
レタス	21,200	460,700	21,500	506,500	101	110
ブロッコリー	8,150	77,000	10,700	90,800	131	118

注:ブロッコリーは平成元年のデータである。

資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」昭和62年、平成元年、平成17年

(4) 以上のことから導き出されるわが国の野菜生産・消費の課題として以下の3点が考えられる。

**○消費構造の変化に対応した消費拡大対策の拡充**

**○食の外部化に対応した国産野菜の供給体制の整備**

**○消費者・実需者のニーズの変化に対応した野菜生産の品目転換**